

織部の解釈

陶磁器の作品、特に織部のような一点ものの貴重な作品に接すると、どうしても作家の技術や制作過程に目が行きがちだ。スタイルの説明では、作品の形成、釉薬、焼成の方法に重点を置く。しかし、それと同じくらい重要なのが、作品が出来上がった後だ。織部は鑑賞するだけでなく、実際に使用するために作られているため、手に取られる度にどのようなクリエイティブな解釈をするかが重要だ。織部の独特の歪んだ形は、使う人に積極的に作品に関わってもらえるようになっている。その形がどのように手に馴染むのか？ 不規則な形の茶碗で、どのようにして効果的にお茶を泡立てることができるのか？ 起伏のある縁からこぼさずに飲むには？ ひとりひとりが、作品を探究することで、自分なりの答えを見つけていくのだ。

織部の装飾も同様に個人の解釈に委ねられ、写実性よりも様式化されたモチーフが好まれる傾向にある。下の5つの器のように、点や四角が連なっているのは、桜の花の初々しさを連想させるが、満天の星空である可能性もある。作者は、作品を購入した上級武士達にとっては馴染みのない農村の風景を描いていることも多く、彼らはその暮らしに触れることができた。

このような様式化によって、作品は作られた当時と同じように今でも魅力的なものとなっている。例えば、この鳴海織部の茶碗。外側に描かれた人物は何を表しているだろうか？ 専門家によると、雪を被った葦を表現しているとのことだが、以前のある当館への訪問者は、ヘアコームやクラゲ、あるいはカップケーキなどと解釈していた。大切なのは、作品との対話であり、作品と鑑賞者の間につながりが生まれる瞬間なのだ。